

## 楽曲紹介

### ベートーヴェン(1770-1827) 序曲『コリオラン』ハ短調 Op.62

解説=柴田克彦

古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が、“傑作の森”と呼ばれる中期まっただ中の1807年に完成した単独の序曲。ベートーヴェンは、ウィーンの劇作家コリンの戯曲「コリオラン」に感銘を受けて作曲し、コリンに献呈したが、戯曲の上演時に演奏されることはなかったという。

コリオランは、紀元前5世紀頃のローマの英雄コリオラヌスのドイツ語名。功賞後、政治的な争いで追放され、敵軍と結託して逆襲を謀ったが、母や妻の説得に従って断念し、悲劇的な最期を遂げた。

曲は、アレグロ・コン・ブリオ、ハ短調。うごめくような第1主題(コリオランを表わす)と、優美な第2主題(母や妻を表わす)を軸に、終始緊張感を漂わせながら進行し、ピッツィカート(コリオランの死)で終結する。総休止の多用が劇的効果を高め、強音と弱音の対比も際立っている。

【作曲年代】1807年 【初演】1807年3月 ウィーン  
【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。

ベートーヴェン<sup>(1770-1827)</sup>

## 交響曲第7番 イ長調 Op. 92

解説=沼口 隆

ベートーヴェンの作品を深く愛したフランスの文豪ロマン・ロランは、交響曲第7番が「リズムのオルギア」であるとした。「オルギア」とは、そもそもは古代ギリシアのディオニソス教の秘教的な儀式を指す言葉だが、現代ではいわゆる「乱痴気騒ぎ」を指すようだ。またロランは、同じ文脈の中で、この交響曲が「超人的なエネルギーの、楽しみのための野放図な濫費」であるとも指摘している。常軌を逸したものがあることを認識しつつ、そこに同時に天才性の精髓も感じ取っていたのであろう。純粋なリズムを通じた熱狂が、既存の枠組みを遥かに超越し、いわば沸点を超えてなお沸き立ち続けている状態とも言えば良いだろうか。こうした印象は無論、楽曲のあらゆるところに妥当するというわけではない。しかし、第1楽章の後半、第3楽章の主部、そしてとりわけ第4楽章などにおいて、沸き上がるような音楽の勢いはたしかに、ベートーヴェンに特有の構築性と言うよりは、純粋な律動によって生み出されているように感じられよう。

スケッチは1811年9月頃から翌年の4月頃にかけて行われた。1812年5月8日付の書簡には「すぐにも、まったく新しい交響曲をお約束できます」とあり、同月25日付の書簡にも「私は3つの新しい交響曲を書きますが、そのうちのひとつはすでに完成しました」とあるため、遅くとも5月頃にはほぼ完成していたと見て良いであろう。1813年12月8日の初演は、同年10月末にドイツのハーナウで起きた戦闘におけるオーストリアとバイエルンの傷病兵のための慈善演奏会で行われ、対ナポレオン戦争での勝利への期待感と愛国的感情にも後押しされて、大きな熱狂を持って迎えられた。4日後の再演も含め、この機会にベートーヴェンは国民的な人気作曲家として歓迎されるようになっていった。祝祭的な性格の強い交響曲が、完成から1年半あまりを経てようやく初演された時、たまたまこうしたタイミングになったということも興味深い歴史的な巡り合わせである。

**第1楽章** ポーコ・ソステヌート イ長調、4/4拍子 — **ヴィヴァーチェ** イ長調、6/8拍子。序奏を伴うソナタ形式。規模の大きな序奏は、明確かつ安定した形式を成しており、主部への導入と言うよりは、それ自体として自律的である。フ

ルートとオーボエが「ターンタタン」というリズムを示して主部に入るが、このリズムが楽章全体の基調となる。フルートによって優雅に提示される主要主題もまた、このリズムを核としており、のちに総奏で力強く繰り返される。

**第2楽章 アレグレット** イ短調、2/4拍子。3部形式。この主要主題のみは1806年にスケッチされており、当初は弦楽四重奏曲ハ長調 op.59-3(いわゆる「ラズモフスキー第3番」)の緩徐楽章の主題の候補として構想された。イ長調の朗らかな中間部に対し、第1、3部分の二つの主部が対比されるが、第1部分では変奏技法が駆使されるのに対し、第3部分では対位法を用いた展開部や中間部の再現があるなど、「A-B-A」には括りきれないユニークな形式である。

**第3楽章 プレスト** ヘ長調、3/4拍子 **トリオ：アッサイ・メーノ・プレスト** ニ長調、3/4拍子 3度のスケルツォ主部が、2度のトリオを挟み込む形の5部形式。ベートーヴェンの時代には、緩徐楽章でのみ異なる調となるのが通例だが、第2楽章が同主短調であったためか、第3楽章で遠隔調が選択されている。躍動感に満ちた主部に対し、トリオではドローン(低音の保属音)が鳴り響き、3度並行音程などの要素と相俟って田園風の雰囲気となる。

**第4楽章 アレグロ・コン・プリオ** イ長調、2/4拍子。ソナタ形式。「オルギア」の真骨頂とも言うべき楽章で、属和音の多用、弱拍の強奏といった要素を豊富に織り交せて、和音の解決やリズムの安定化を無意識に期待させることにより、全体により一層の推進力が与えられている。動機的な関連づけは綿密だが、軍隊行進を思わせる副次主題のように対比的な要素も含まれており、簡素な素材から多様性を生み出す手腕がいかに発揮されている。

【作曲年代】1811年9月頃～1812年5月頃 【初演】1813年12月8日 ウィーンにて、作曲家自身の指揮による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

ぬまぐち・たかし(音楽学)／東京藝術大学准教授。主要な研究領域はベートーヴェンをはじめとする18～19世紀のドイツ語圏の音楽。共著に『楽譜を読む本～感動を生み出す記号たち～』(ヤマハミュージックメディア)ほか。共訳に『ベートーヴェンのピアノソナタ第32番 op.111 批判校訂版: 分析・演奏・文献』(音楽之友社)ほか。